

ドラマセラピーの実践・研究・手法

ドラマセラピーにおけるアセスメント

尾上 明代

今号では、ドラマセラピー実施に際して、クライアントやセラピープロセスの進展等を査定・評価する指標について記述する。さまざまあるアセスメント方法の中でも私が特に重要だと思うアプローチを紹介したい。それは、ドラマセラピストの Susana Pendzik が創った「6つの鍵のモデル」という統合的な方法で、「ドラマ的現実 (dramatic reality)」という概念に基づいた質的査定である。

以下、Pendzik の論文から、6つそれぞれを説明する。

ドラマセラピーには本当にたくさんの多様な手法とアセスメント方法があるため、査定はとてもチャレンジングな分野だと Pendzik は言うが、「6つの鍵のモデル」はすべてのドラマセラピーに共通な概念である「ドラマ的現実」を使うので、私はとてもわかりやすいと思う。

「ドラマ的現実」というのは、内なる想像の世界を表現する場である。それは投影された構造を持っていて、人の内的世界、他者との関係、自我機能等について多くの情報を与えてくれる。一般的な心理療法においては、治療同盟、「通常の現実 (ordinary reality)」における言語的な場、メタレベルでの転移・逆転移の場等で機能するが、ドラマセラピーではそれとは対照的に「ドラマ的現実」と、2つの現実（「ドラマ的現実」「通常の現実」の）の移行期に枢要なプロセスが起こる。ゆえに、この視点からのアセスメントが重要となる。

以下が6つの鍵である。

- 1 「通常の現実」と「ドラマ的現実」の間の通路（往還）
- 2 「ドラマ的現実」の質とスタイル
- 3 そこに出てくる登場人物と役

- 4 筋、テーマ、葛藤等の内容
- 5 「ドラマ的現実」への外側からの反応
- 6 メタ現実、または表明されていないサブテキスト

これは質的な方法なので、ドラマセラピストによる主観的な観察を基本にしたモデルである。セラピストがセッションのプロセスをする際に、この6つの鍵をアンカーポイントとして使う。

第1の鍵：通路（「通常の現実」から「ドラマ的現実」への移行）

これは個人の感情的な状態、認知的な能力、発達上の障害、自我強度と機能、そして対人関係の問題などを反映する。「ドラマ的現実」に出入りできる能力は、人間のパーソナリティの様々な側面を明らかにする。これには良い境界線を示すことや、はっきりした自己という感覚、心の中で構成物を作り上げてそれを現実的な対象に投影する能力などを含む。

第2の鍵：「ドラマ的現実」の質とスタイル

ここでの1つ目のポイントは、「ドラマ的現実」の質、つまりどのくらい上手にできているかという点である。これは演技技術の評価ではなく、作り出した想像的な世界に本心から入り込める能力の評価だ。ドラマセラピーが効果を発揮するためには「ドラマ的現実」が十分な良いレベルであることが必要である。簡単に言えば、この質とは、劇に流れと安定性があること、適切に劇に参加していること、そして美的距離、コミュニケーション、参加を他者と分かち合えていること、深さ、そして内面の統一性である。

2つ目のポイントは、その劇に独特の特徴、つまりスタイルがあるかどうかである。「ドラマ的現実」というのは人形劇から鬼ごっこ、儀式場面演技まで様々な形があるが、そこに、他とは違う、劇を創った人やグループの独特の特徴があるかどうかである。この側面を考慮に入れることは大変重要だ。スタイルの変化は治療的な進展または後退のサインとしても見られ、（作っていく劇の）ジャンルを変えることは、治療的介入として使われることもあるからである。

第3の鍵：登場人物（キャラクター）と役（ロール）

登場人物と役は違う。例えば、王、母、天使、大統領などは役である。俳優、観客、脚本家、演出家なども、演劇の機能を遂行しているという意味において役である。それと対照的に登場人物は、具現化された役たちである。（例えばオバマ大統領の場合、オバマはキャラクターで、大統領は役である。）一般的に登場人物は、よりダイナミックで流動的な構造を持ちたくさんの役を演じることができるので、人のパーソナリティに近い。

査定のポイントとして、たとえば、以下のような点を観察する。

- ・ 登場人物や役はどのように結びつき統合されているか。
- ・ 登場人物はたくさんの役を代表しているか、または皆同じ原型的な役と結びついているか。
- ・ クライアントは、どのような機能的な役(演出家、観客、演技者)を演じているのか、いないのか。
- ・ そのような登場人物と役たちは、「ドラマ的現実」の中で現れてきているか、それともクライアントはそうすることが難しいのか。

第4の鍵：内容一筋、テーマ、葛藤

内容には筋、テーマ、葛藤、象徴、イメージ、感情、コンプレックス、又は強迫観念などが含まれる。「ドラマ的現実」は投影されて形作られるものであり、人の内的世界であるから、心の中の核になる問題やメカニズムが表現される傾向にある。

査定のポイントとして、たとえば以下のような点を見ていく。

- ・ 筋または葛藤で、繰り返し現れるパターンは何か。
- ・ 筋は進んでいるか、行き詰っているか、この物語が進んでいくためには何が起きる必要があるのか。
- ・ ドミナントストーリーの影にオルタナティブストーリーはあるのか、それは何か。

第5の鍵：「ドラマ的現実」への反応の仕方

この鍵は「通常の実現」に戻る時、体験を統合して評価することに関してのものである。自分が演じたものにどのくらい価値を置くかは、その人が現実で達成したことをどのように評価するかのパターンを反映している。これは、クライアントが、主観的な体験をプロセスして統合する能力や、自尊感情について査定する助けになる。またその人が、ドラマセラピーから獲得でき得た恩恵が反映されるので、「ドラマの実現」で演じられたワークがその人の人生に与えた重要性を評価することができる。

たとえば以下のような点について見ていくと良い。

- ・ 「ドラマの実現」でしたことを、その人がどのように見ているか。
- ・ それをその人は重要な体験と考えているか、またはあまり価値を感じていないか。
- ・ その反応はその人の判断のパターンをどのように反映しているか。
- ・ 「ドラマの実現」の中で演じられたワークは、現実生活にインパクトを与えているか。

第6の鍵：メタ現実、または表明されていないサブテキスト

6番目の鍵には、転移や逆転移のプロセス、隠された問題や葛藤、言語化されていない外界からの影響(政治的な出来事や社会的緊張、または天気や健康に関する心配など)がある。この鍵はドラマセラピーで必ずしもアクティブになるものではない。精神力動的アプローチが転移をメインの治療的介入に使うのとは違って、「ドラマの実現」は、安全にこの側面に光をあてることができる。ドラマセラピーではこの鍵は必要不可欠ではないが、もしそのようなことが起きたときは、他のすべての鍵が機能するのを邪魔してしまうため、注意深く観察していなければならない。

たとえば、以下のような点を見ていくと良い。

- ・ セラピーのプロセスに伴って、直感や説明できない感覚や考えが浮かんできたか。
- ・ それらはどこから来ているのか。
- ・ それは、転移と関係していることか。
- ・ 逆転移など、セラピストが吟味しなければいけない問題はあるか。

以上が6つの鍵である。私自身は、長年の実践から得られた感覚として、クライアントの背景や診断名等より、この「ドラマの実現」という概念からアセスメントすることが、大変有効であると感じている。この感覚は、実践開始初期から今まで変わっていない。私はこのアセスメント法が発表されるよりずっと前からドラマセラピーを

実践してきたが、私自身が発見したものと合致している。この方法を知ったときは、Pendzik が私の代わりに言語化してくれたと感じた。

Pendzik は、あるトラウマ研究を紹介し、「想像的な領域に入っていける能力は、PTSD の症状を作り出すことなくトラウマを生き抜くという健康的な対処メカニズムと同様の働きをすることが明らかになった」と述べている。このように理解すると、現実と想像との間の往還という第一の鍵は、ドラマ以外のモダリティーを使うセラピストやクライアントにも役立つと言えるだろう。

文献

Dickinson, P. & Bailey, S. (2021), *The Drama Therapy Decision Tree: Connecting Drama Therapy Interventions to Treatment*, Bristol, UK: Intellect.

Pendzik, S. (2012), The 6-Key Model-An Integrative Assessment Approach. In Johnson, D. R., Pendzik, S. & Snow, S. (2012). *Assessment in Drama Therapy*, Springfield, IL: Charles C. Thomas Publisher.